

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院学生研究

2021年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	日本文学専攻
研究代表者 (2022年3月現在のものを記入)	在籍課程・学年		氏名	
	<input type="checkbox"/> 博士前期課程 年 <input checked="" type="checkbox"/> 博士後期課程 1年		齊藤 探花	
指導教員	所属部局・職名		氏名	
	文学部・教授		鈴木 彰	
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文	・ 社会	個人・共同の別
				個人
個人				共同
共同				名
研究課題	仮名本『曾我物語』の生成と変容——本文研究を中心に——			
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2022年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程・1年		齊藤探花	
研究期間	2021 年度			
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

『曾我物語』は、さまざまな文化・文芸と関わりあいながら長きにわたって読み継がれてきた。仮名本は、そうした『曾我物語』の受容の歴史に欠かせない諸本群である。本研究は、未だ研究の余地がおおく残されている仮名本系諸本の生成と変容の解明に向けて、諸本の本文研究を行うための基盤づくりを目的とする。そのために、主要伝本を収集し、本文分析を開始すること、仮名本系諸本の展開相を視野に入れた作品世界の分析をおこなっていく。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 中世文学 } [仮名本『曾我物語』] [生成と変容]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

「研究の概要」に示した通り、本研究は、『曾我物語』の受容史研究に向けた、仮名本系諸本の生成と変容を解明するための基礎研究の一部である。本年度は、次年度以降の本文分析を中心とした諸本研究に向けた基盤づくりを目的に、諸本の収集・調査と十行古活字本を軸に据えた作品世界の分析に取り組んだ。

1. 諸本の収集・調査

静嘉堂文庫を訪れ、松井本・岸本本・十二行大型古活字本の原本を閲覧し、書誌調査をおこなった。このうち仮名本の主要伝本とされている松井本・岸本本は、複写申請をし、手元に集めた。武田本甲本・武田本乙本については、國學院大學デジタルライブラリーにて閲覧できる環境が整っているため、所蔵館に確認をとり、全巻ダウンロードし、収集を完了させた。

7月以降に予定していた円成寺本・天理大学附属天理図書館蔵本の収集については、それぞれ所蔵先での調査を含めた収集を計画していたが、新型コロナウイルスの感染の再拡大により所蔵先での調査が厳しいと判断したため、計画を変更した。具体的には、所蔵先に申請し、遠隔複写での収集に変更した。原本の閲覧および調査はできなかったが、複写物を手元に集めることができたため、次年度以降の本文分析が可能となった。なお、計画の変更に伴う予算の関係から、戸川本・慶応義塾大学図書館蔵本に関しては、次年度以降に調査・収集を行うように変更した。

2. 作品研究と成果発表

『曾我物語』の流布本の基盤となった十行古活字本(以下、十行本と記す)を対象に、主要人物のひとりである五郎の描かれかたを通して、人物造型の方法を分析した。さらに、仮名本のなかでも最古態を留めているとされる太山寺本と対照することで、仮名本の展開相を視野にいれつつ、十行本の五郎に対する造型意識の質を分析した。以下、その結果を報告する。

(1)五郎の造型

十行本は、巻第3を中心に兄との関係を通して、五郎の人物像をつくりだしていた。この人物像を基点に、巻第4からは五郎の心情が形成・変質していく過程を描き出していた。さらに、巻第4後半では、母親との関係を通して、形成された心情が揺らぎながらも確立していく過程が描き出されていた。こうした五郎の描かれかたの分析から、心情の変質過程を描くことで人物像を意味づけていく十行本の人物造型方法を明らかにした。

(2)仮名本の方法

仮名本の人物造型の方法は、太山寺本を中心に据えた分析によって、他人物との交流や出来事によって人物の心情や性格を変質させることなく、物語を一貫して「固定化」させていると考えられてきた(村上學「真字本と仮名本のストーリー構造」『曾我物語の基礎的研究』風間書房、1984・5)。しかし、今回の五郎の造型を通じた分析からは、物語の展開や他人物との交流とからめて、五郎の心情の形成・変質過程を描いたうえで決定づけるという、人物造型方法が確認された。この方法は、太山寺本の段階から確認することができ、これまで見落とされてきた仮名本の方法のひとつといえる。

(3)仮名本の展開

(1)にて明らかにした五郎の人物造型は、太山寺本の段階から確認される。ただし、五郎の造型に対する意識の程度に注目して、十行本と太山寺本を対照すると、巻第3を中心に明確な差が見られた。十行本では、太山寺本よりも五郎個人の輪郭を際立たせて造型していることが明らかになった。こうした五郎に対する造型意識の深さは、十行本の特質として受け止められるものである。

研究成果の概要 (つづき)**(4) 展望と成果発表**

(1)～(4)の分析結果を踏まえると、ひとくちに仮名本といっても、最古態の太山寺本の段階から流布本の段階にかけて、造型意識に変容の跡がうかがえる。今後は、諸本研究に踏み出すことで、諸本の動態と具体的な分布相の把握が目指される。以上の研究成果は、2021年12月に開催された立教日文大会にて発表した。

3. 本文分析

上記の作品研究を踏まえ、来年度に向けた本文分析に取り組み始めた。具体的には、対象とする諸本を増やし、五郎に対する造型意識のちがいが顕著にみられた巻第3に焦点化して、造型意識の質的な変化を比較分析した。

仮名本は、甲乙の二類に下位分類され、乙類が古く、その乙類本文に真名本系統の本文を混入させたものが、甲類とされている。乙類に分類される武田本甲本、乙類と甲類の中間的形態を持つとされる南葵文庫本を対象にくわえて分析したところ、太山寺本より一段階後の本文を持つとされる武田本甲本の段階から、五郎の輪郭を際立たせようとする意識が確認された。この意識については、武田本甲本・南葵文庫本・十行本と段階的に深まっていく動きがうかがえた。現状では限定的な分析範囲に留まっており、この分析結果を明確に結論づけることはできないが、仮名本系諸本の具体的な動態が明らかになりつつあるといえる。次年度以降、収集した伝本の本文研究に取り組むことで、より本格的に分析を進めていく予定である。

4. 同時代文芸との関わりあい**(1) 「小袖乞」場面の分析**

『曾我物語』のなかでも、いわゆる「小袖乞」場面をとりあげ、十行本を軸に、真名本・幸若舞「小袖曾我」・能「小袖曾我」を視野に入れて分析をおこなった。従来、芸能作品との関わりあいのなかで論じられてきた傾向にあり、分析の際には、真名本・仮名本の該当場面のみを部分的に切り取って、芸能作品と横ならびにする形で研究が進められてきた。しかし、真名本・仮名本における当該場面は、作品世界を構成する一場面であり、両本の作品世界における位置づけを見定めただうえで、芸能作品との相関関係を分析する必要がある。よって、報告者は、まず曾我兄弟の母親の人物造型を手掛かりに、十行古活字本における当該場面の位置づけを目指し、分析をおこなった。

(2) 絵の分析

本学所蔵の『曾我物語絵』の閲覧および書誌調査をおこなった。『曾我物語』の絵入り版本や幸若舞曲をはじめとした周辺文芸との関わりあいを視野に収めつつ、次年度以降も引き続き調査・分析に取り組んでいく予定である。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

④その他

齊藤探花「仮名本『曾我物語』の展開――十行古活字本における五郎の人物造型を通して――」、立教大学日本文学会大会 (オンライン開催)、2021.12.04